

ホトトギス

二月号

ホトトギス

昭和二十三年三月二十一日発行
今期五号二月一日発行（第百二十号）



風雅の小筥「六十」

廣太郎

今回が六十回目という事で、このコーナーも丸五年連載し続けた事になる。先月は丸ビル建替に伴い平成八年五月一日から東銀ビルに移った事を書いたが、丸の内南口から北口が最寄の改札となった事により、同じ東京駅とは言え結構生活が変わったように思った。特に昼食のレストランは、丸ビル方面が結構遠くなり、どちらかというところの界限は大手町に近くなるのである。それ迄よく利用していたレストランはだんだん疎遠になってきて、大手町の方に足が向くようになった。そこで見付けたのがカレー店の「サンテリア」である。「大手町ビル」という当時オーナー会社の三菱地所の本社があったビルの地下のレストラン街で偶然入ったのが縁となつたのだが、それまで経験した事の無い辛さなのである。最初はびつくりしたのだが、結構辛い味は大好きなので直ぐに慣れ、その後は常連のように通うようになった。この店とはそれから長い付き合いとなり、又このコーナー等で御登場願う事になると思う。

丸の内北口であるが、これは結構全国区だと思うが、NHKニュースの資料映像で、東京駅からサラリーマンが出社しているところが流れているがこれはこのロケーションである。私も当時ホトトギス社に向かう時、交差点の反対側からテレビカメラがこちらを写しているのに何度も出会った。ひよっとしてその時のニュースの資料映像で私の姿が大勢のサラリーマンに交じって写り込んでいるのではないかと思ひニュースを見ていた事があるが、全く発見する事が出来なかつた。

廣太郎句帳 廣太郎

令和四年二月二日 NHK文化センター

坂多き学生街や日脚伸ぶ
早梅や首都の一隅引き締めて
街路樹の走り根楚々と冬の草
万両の丈に鳥語の降りて来る
凍蝶の生氣靈気に誘はれ

二月三日 蕉心会通信句会

伊吹嶺の稜線統べて雪女
虎落笛眠りの浅き人とゐて
寒月の固まつてゐる夜明かな
神の手に委ね凍蝶地に還る
蒼天に早梅解れゆく早さ
枯色の中早梅の孤高かな
見る人も無く寒牡丹色放つ

二月三日 「夏至」三十周年祝句

三十年を祝ぐ蝦夷の地の春めける
暖かや先師を偲ぶことも祝ぎ
北窓を開けば募る祝ぎ心

二月四日 六甲会

立春の富士蒼天を従へて
遠山に日矢突き立てて春立てり
公魚の銀鱗宙をまさぐれり
物言はぬ母に立春変り無く
釣られたる公魚空と対話して
立春に託けて寄るワインパー
水脱いでより公魚の鈍色に
春脱いで言の葉交すことの無く

二月五日 芦屋ホトギス会

春菊を要に京のおぼんざい

汀子邸水音にある余寒かな
二月六日 野分会芦屋例会

国栖奏や神々の声立ち上る
召し出しに応へ春寒解きゆく
一人居の恙を託ち春寒し

二月六日 青嵐会芦屋例会

椀種の白魚の目に見透かされ
春の霜降りて天使は羽畳む
這ひ出づるものに春霜てふ試練
水音に育てられたる春の霜
白魚や水の機嫌に汲まれゆく
二月八日 「河内野」新年を寿ぐ会投句

残雪の伊吹稜線和らげて

俳磚の文字なぞりゆく春の雪
二月九日 工業倶楽部

早春の風の便りに安堵して
街騒の軽く奏でるしよしゆんかな
薄氷の日差に剥がれゆく利那
薄氷を蹴らせてゐる水の精
デージーや少女は恋に目覚めゆく
病窓に置かれ雛菊色放ち

二月十日 土筆会選者吟

影持たぬ白魚重き命かな
薄氷の動けば季節遠ざかる
猫の恋鬨を攫つてゆきにけり
京老舗白魚椀を彩れり
猫の恋成就の顔でありにけり
鬨を統べ鬨を恐れて猫の恋
草囀んで薄氷色を足してゆく

二月十四日 朝日カルチャー若草句会

雪解の山を従へ富士真白
白梅に羽音も白く染め上がる

その中に命宿らせ雪解水
一滴の雪解水より大河へと

二月十五日 北國文芸選者吟
言の葉を失ひし人冴返る

二月十七日 登高会

金縷梅の風に纏れてゐる色香
その下に命の叫び山火かな
金縷梅に来て奏でたる風の詩
夕星を引つ張り出して山焼ける
句心は金縷梅の黄に触れてより

二月十八日 廣邦会

早春の息吹列島はみ出して
早春の車窓の富嶽よそよそし

二月二十日 虚子生誕俳句祭

記念樹の枝の先より冴返る
魂を呼び覚ます如麦踏める

二月二十二日 若水句会選者吟

逝きし人生れる人に下萌ゆる

二月二十三日 目黒学園句会

扉越えてより恋猫となりゆけり
猫柳天使の羽が解きゆく
序破急に野火走りたる利那かな
せせらぎに色翻し猫柳

二月二十七日 青嵐会東京例会選者吟

彼の人の消息聞くも余寒かな
海風に山風重ね春浅し
水動くより白魚の遡上かな
孕猫ずしりと扉を飛び越せる
固き空より金縷梅の解れゆく

二月二十七日 野分会りモト句会

国栖奏や帝は京に向き眠る
春寒や天に召される日も近く

雑詠

廣太郎 選

句碑拜し修す一人の年尾の忌 長岡 安原 葉
 秋風や湖中句碑にもある歴史 同
 子規偲ぶ敬老の日となりしこと 同
 一葉落つ人工島の風の音 西宮 本郷桂子
 初秋の日差しに風の間合かな 同
 潮の目の色の百態秋めける 同
 人と犬橋に混み合ふ水の秋 東京 阪西敦子
 雲現れて水引草を見失ふ 同
 今年また風よく抜けて生姜市 同
 草も木もなびく力を持ちて処暑 渋川 木暮陶句郎
 葛の花愛犬の墓この辺り 同
 今生は遊ぶ生なり赤とんぼ 同
 秋天を蹴つとばしたる逆上り 神戸 藤井啓子
 空港を出る一步より花野かな 同
 残菊になほ明日の風明日の色 同
 シャンデリアより秋灯の雫かな 袋井 湖東紀子
 目に見えぬものの確かさ秋の声 同
 月光に陰影生まれたる都会 同

歓楽の灯も秋の夜をまぬがれず 鹿見島 上迫和海
 輝きの密なるとき銀の月 同
 十六夜の月照る火山灰の匂ふ街 同
 行くあてもなき秋晴へ門開く 香川 湯川 雅
 秋声や耳を澄ませば目の虚ろ 同
 葛原や一枚の風歪ませて 同
 夕闇のすんと落ちて夜長かな 八尾 山下美典
 いささかの湿度のありし残暑かな 同
 稜線の凜と正して月今宵 同
 炎帝に噛みつかれたる首根つこ 相模原 木村享史
 牙剥いて来る炎帝を宥めても 同
 炎帝の一と息入るる日は我も 同
 鈴虫に磨かれて行く夜の瑕 神戸 玉手のり子
 思ひ出は消ゆることなく白露かな 同
 露けしやかうして旅の出来しこと 同
 地下道を抜け初雪へ一歩かな 東京 今井肖子
 カフェオレとキャロットーキ細雪 同
 池こぼる風の曲線そのままに 同
 萩の古寺歩す虚子の句碑子規の句碑 神戸 山田佳乃
 白萩の白を磨ぎたる雨雫 同
 三日目の桃の香れる夜の厨 同
 風つづり初めし枝先萩の花 龍ヶ崎 今橋真理子
 色鳥や風の隙間に色見せて 同
 颱風の近づく空に星ひとつ 同

雑詠句評（二月号より）

壇ノ浦よりの流燈かと思ふ 熊本 岩岡中正

女王も汀子も空に月ひとつ 東京 今井千鶴子

女王は九月八日に逝去した前イギリス女王のエリザベス二世のことだろう。エリザベス女王のなくなつた日は、十五夜のほんの数日前であつた。その永い治世に自分の人生を重ねるとき、やはりその時間を共にしてきたもう一人のことを思い出さずにはいられないだろう。エリザベス二世は一九二六年、汀子は一九三年生まれ、その二人とほぼ同年代を生きてきた作者と別の空に人はいて、しかし、空にも地にもあたたかな月光が届く。

（敦子）

令和四年は多くの著名人が例年に比べ多く亡くなつたようう。ホトトギスにとっては汀子名誉主宰の逝去は最も大きな出事であるが、世界的には英国のエリザベス女王の逝去ではないろうか。季節がしみじみと語られている。（廣太郎）

この句について作者は、「阿蘇」誌の中で、「この流燈の川の川面に上ってくる潮に着目したもの。この川尻の川港は河口に近く、ときに、上ってくる潮に、精霊舟はいよいよためらいがちに流れてゆく。この句は、流燈のこの世に残る思いを『壇の浦』に見た。」と述懐している。まさにじつと観て深く感じ入り、心が季節と一体となつた瞬間にふつと湧き上がってくる感動が捉えられたのである。ふるさとの川を流れる流燈に寄せる深い思いが伝わってくる。そしてまた、先頃、作者の上梓された『幕末の漂流者・庄蔵―二つの故郷』に描かれた作者の父祖で船問屋・庄蔵の過酷な漂流の物語へと思いは至る。（眞理子）

源平合戦の最後の舞台である壇ノ浦の合戦は歴史に語り継がれている。この戦いで滅亡した平家の武者を偲ぶ姿がこの句から感じられる。歴史のロマンを感じとられる句として、ユニークな視点に好感が持てる。（廣太郎）

月光となりて届きし師のことは 横浜 進藤剛至

掲句を拝見した折りが折りだけに、師のことばは、先にご遊された汀子先生のことば……と思つてしまふ。

汀子先生は折りに触れて私どもを慈しみを以てやさしいことばで、多くのことを、教え諭してくださつた。

そのことばが、今、清澄な月光となつて、作者の心に深く滲み入つてゐるのであらう。(こほ歩)

汀子に薫陶を受けた作者である。生前色々な教を賜つた事を思い出してゐるのであらう。春に亡くなり、季節は移り変わつて秋を迎えた。月を眺めながらあらためて師の言葉を臨場感を持つてしみじみと思ひ出しているのである。(廣太郎)

競ひ合ひ笑ひあひたる遠き夏

龍ヶ崎

今橋真理子

「遠き夏」の日に「競ひ合ひ笑ひ」とはおそらく野分會のことではないだろうか。若い方の為に汀子先生が立ち上げられた勉強會。一泊二日の朝昼夜と容赦ない連続會の厳しい合宿とお聞きしていたが、その方々が今はホトトギスの中のみならず、俳句界の中で大活躍をされている。しみじみいい會をつくり若者を育てあげられたと思う。「競ひ合ひ」だけならば苦しみだけの思いだが、「笑ひ」の措辞でいかに楽しい會であつたか有意義な會であつたかも想像できる。今は亡き汀子先生を偲び、厳しさ優しさをし

みじみと回顧している作者。(むつみ)

俳句の修行だろうか、作者は野分會の嘗てのメンバーであつた事を考えると野分會の夏行を想像したりするが、特に汀子が亡くなつた令和四年十月、この稿を認めてゐる時はどうしてもその発想になつてしまふ。偲ぶ心が尊い。(廣太郎)

補習にも二時間目ある夜長かな

神戸

藤井啓子

「夜長」といえば、秋の夜のどこかしみじみとした趣があるものだが、この句の「夜長」は、「夜学」の夜長。夜の補習といえばふつう一限だけが二限目まであるのだという驚きが、補習にも「二時間目」ある「夜長」かな」のリズムにも出ている。二時間目に対する生徒たちの、あるいは真剣、あるいは倦怠のさまざまな表情を、よく描いている。(中正)

学校の成績によつては補習を受けなければならない生徒が居るのは何時の世でもあるもので、筆者もその記憶がある。放課後一定の時間居残りでの授業だつたと思うが、二時間目まであるというのが、少し複雑な夜長である。(廣太郎)